



Title	養正高等普通学校体育教師峰岸昌太郎について
Author(s)	西尾, 達雄
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 104, 169-185
Issue Date	2008-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.104.169
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32496
Type	departmental bulletin paper
File Information	P169-185.pdf



養正高等普通学校体育教師峰岸昌太郎について

西 尾 達 雄*

Shotaro Minegishi, Physical Education Teacher
at Yangchung Junior High School

Tatsuo NISHIO

1. 『日章旗とマラソン』に描かれた峰岸像と研究課題

峰岸昌太郎は、1921年に朝鮮に渡り、養正高等普通学校（以下「養正高普」と略）の体育教師として勤めた人物である。

これまで峰岸昌太郎について紹介しているのは、鎌田忠良著『日章旗とマラソン』（潮出版社 1984年）という書物だけである。この中で示された峰岸昌太郎像は、朝鮮人に愛され、朝鮮人を日本人と区別なく指導した体育教師であり、陸上競技の指導者であった。峰岸を朝鮮人に敬愛させた最も大きな功績は、養正高普を大阪神戸間中等学校駅伝（通称阪神駅伝）で、初めて出場した1929年から峰岸が退職する31年までの3年間に連続優勝させ、「陸上王国養正」を築いたことである。しかも、1932年ロサンゼルスオリンピックマラソン6位入賞の金恩培や、1936年ベルリンオリンピックマラソン銅メダリスト南昇龍などのオリンピック選手をはじめとする多くの優秀な選手を生み出し、ベルリンオリンピック金メダリスト孫基禎を生み出す土台を築いたことであった。

その略歴について鎌田は、次のように述べている。

「峰岸昌太郎は九州出身で、日本体育専門学校（現・日体大）時代は長距離選手として活躍し、養正では教鞭をとることちょうど十年、阪神駅伝三連覇を置き土産に同国体育協会に移った。二、三年後ここから峰岸はさらに旧満州国の奉天に移って体育教師をしていたが、敗戦を機に消息が途絶えてそのまま現在に至っている、というのが彼のおおまかな人物像である」。¹⁾

ここで、「体育専門学校」と述べているのは、「日本体育会体操学校」の誤りであるが、日本体育大学の前身である「日本体育会体操学校」以前の活動や、突如教師を辞め、朝鮮体育協会（以下「朝鮮体協」と略）に移った経緯は何か、さらにはその後二、三年で満州に渡った理由が何であったのかなどは不明である。鎌田も引用している『養正体育史』でも、これらについて叙述していない。²⁾ 第一の課題、すなわち、体操学校以前の活動については、これまで履歴に関わる資料として九州地方を中心に学校史、教職員名簿、県史等の資料収集を試みたが、その所在は確認できず、依然詳細は判らないままである。本稿は、第二の課題である突如教師を辞めた経緯について、養正高普時代十年間の活動内容を『養正体育史』を基礎資料として分析し、同校退職に至る経緯を再検討しようとするものである。第三課題である体協での活動と渡満の経緯については、昨年夏の第7回東北アジア体育・スポーツ史学会（於 忠南大学校、韓国）で概要を発表しており、詳細は別稿で検討することにしたい。

* 北海道大学大学院教育学研究院教授（体育計画〔体育史〕研究グループ）

2. 峰岸昌太郎の略歴

現在判っている峰岸昌太郎の略歴は、以下の通りである。

- ・ 出生地、生年月日は不明。
- ・ 1917 年、日本体育会体操学校卒業。³⁾ 卒業後 4 年間の経歴は不明。
- ・ 1921 年 4 月 20 日、養正高普に赴任。就任の挨拶で、「九州の南国から風俗と習慣が異なる異邦に来ることになったことを無限の栄冠と感じるという印象的な言葉を語った」⁴⁾ という。これは、出身が九州であることを示すのか、赴任前に九州にいた事を意味するのかは不明。以後 10 年間養正高普に勤務。
- ・ 1931 年 5 月 8 日、養正高普を辞職。
- ・ 1931 年 9 月 7 日、朝鮮体協主事に着任。
- ・ 1932 年 12 月 1 日、朝鮮体協主事を解職。
- ・ 1933 年 1 月 23 日頃、満州新京に就職のため転居。⁵⁾ 以後は不明。

3. 養正高普における峰岸の教育活動

『養正体育史』によれば、峰岸は次のように評価されている。

「峰岸先生は、公正で立派な教育者であった。彼は養正高普が日本の駅伝競走に参加して連勝したとき、とても熱心に指導して、必ず日本チームを制圧しようと努めた。日本協会役員たちが『貴方はいったいどの国の人なのか』と詰難すると、先生は平然と『競技は正々堂々と戦うものではないか』と反問したという。それから応援団に対する干渉が激しくなったが、養正は堂々と新記録を出し優勝して、日本人たちを形無しにした」。⁶⁾

このような評価は、峰岸在任中だけではなく、退職後も変わらなかった。このように評価された峰岸はどのような指導を行ったのかを見てみよう。

1) 運動部における役職

『養正 90 年史』によれば、「個人次元の趣味に止まった学生たちの運動がグループ活動として組織化体系化するようになったのは、1921 年以後のことであった」⁷⁾ といい、「1921 年 4 月 20 日体育教師として赴任した日本人峰岸先生は授業時間を通じて学生たちに積極的に体育を指導する一方、課外活動として運動生活を積極勧奨、運動部が相次いでできた。陸上競技部、庭球部、野球部が 1921 年同じ時期に発足した」⁸⁾ と述べており、峰岸の赴任以後運動部活動が盛んになっていったとしている。それは、表 1 の歴代運動部部長名を見れば歴然としている。

この表から明らかなように、峰岸は在職中を通じて、運動部長として運動部全般の指導に責任を負うと共に、陸上部は赴任以来辞職するまで指導し、その他にも、庭球部やラグビー部の指導にも関わっていたことが判る。庭球部では、創設の翌 22 年の夏期休暇を利用して最初の遠征試合を行っており、峰岸はこれを引率している。⁹⁾ また、1922 年頃から活動が始まったスケート部は部長を置かないで、体育教師が管理だけをしていたようであるが、26 年 1 月に鴨緑江で開催された国際氷上競技大会に朝鮮代表として選抜された 2 年生李福男を峰岸が引率している。¹⁰⁾ このように峰岸は、着任後体育の授業だけではなく、積極的に運動部の指導に関わっていたことが窺える。

表 1. 各運動部歴代部長名簿（峰岸在職期，敬称略）

1921年 運動部長 峰岸昌太郎 陸上部長 峰岸昌太郎 庭球部長 峰岸昌太郎 野球部長 崔在鵬 1924年 運動部長 峰岸昌太郎 同副部長 崔在鵬 庭球部長 峰岸昌太郎 陸上部長 峰岸昌太郎 野球部長 崔在鵬 1925年 運動部長 峰岸昌太郎 同副部長 崔在鵬 陸上部長 峰岸昌太郎 庭球部長 峰岸昌太郎 野球部長 崔在鵬	1926年 運動部長 峰岸昌太郎 同副部長 崔在鵬 陸上部長 峰岸昌太郎 庭球部長 峰岸昌太郎 野球部長 崔在鵬 1927年 運動部長 峰岸昌太郎 同副部長 崔在鵬 陸上部長 峰岸昌太郎 庭球部長 峰岸昌太郎 野球部長 崔在鵬 柔道部長 李圭鉉 蹴球部長 崔在鵬	1928年 運動部長 峰岸昌太郎 同副部長 崔在鵬 陸上部長 峰岸昌太郎 庭球部長 金淵昌 蹴球部長 崔在鵬 柔道部長 李圭鉉 剣道部長 鯉登弘道 1929年 運動部長 峰岸昌太郎 同副部長 崔在鵬 陸上部長 峰岸昌太郎 庭球部長 金淵昌 蹴球部長 崔在鵬 柔道部長 李圭鉉 剣道部長 鯉登弘道	1930年 運動部長 峰岸昌太郎 同副部長 崔在鵬 陸上部長 峰岸昌太郎 庭球部長 金淵昌 ラグビー部長 峰岸昌太郎 蹴球部長 崔在鵬 柔道部長 李圭鉉 剣道部長 鯉登弘道
---	--	--	--

出典) 養正体育史 933 - 935 頁より作成

2) 養正高普での体育指導

① 指導内容と方法

①-1 基本としての陸上競技

『養正体育史』によれば、「峰岸は日本でもマラソン選手として有名な人であった¹¹⁾」という。しかし、管見の限り日本陸上競技史上に彼の名前を確認することは出来なかった。¹²⁾とは言え、陸上競技に関わっていたことは間違いないようである。

彼は、養正高普赴任直後から「陸上は、すべての競技の基本である」¹³⁾と強調して、特に、競走を熱心に指導した。最初、学生たちは100 m, 200 mなどの短距離走から始めて、1000 m, 2000 mまで競走させられたが、その後、校庭を出発して漢江の人道橋まで往復約10 kmの競走をさせた。峰岸は、「当時四十代の若くない年にもかかわらず、体育時間になれば軽快なランニングシャツの身なりで白い運動帽子に白い運動靴をはいて率先して範を垂れ、学生たちと一緒に走って学生たちを励ました」¹⁴⁾という。それは課外活動でも同じであった。その姿を見て、「学生たちも上衣を脱いで制服のズボンを着たまま重い靴を履いて走らなければならなかった」。この「漢江往復訓練」は、当時毎日繰り返されたという。¹⁵⁾

①-2 オレンジパンツ

養正高普陸上部を象徴するものの一つに「オレンジのパンツ」がある。これを作ったのが峰岸であった。これについては、次のようなエピソードが伝えられている。

「晴れあがった明るいある秋の日、峰岸先生は校庭の下で柿の木を見つめていたが、青く高い秋の空の下で朱色の光で輝く柿の輝きがあまりに美しいと思った。その瞬間、先生はこの色でパンツを作り陸上部員にはかせて秋空の下運動場を走らせれば、どれほどいきいきとして活動的で爽快かという考えが浮かんだ。しかし、その当時は、今とは違って、ようやく白色パンツをはいて運動場に出てもおこがましい時であったので、オレンジのパンツをはくということは、とても革新的な着眼であった。しかし先生は、果敢に決心してすぐに実践に

移し、オレンジパンツを全陸上部員に着用させた」。¹⁶⁾

峰岸がこのような奇抜なパンツを着用させたのは、確かに「いきいきとして活動的で爽快」な姿を描いたからであったであろうが、それだけではなく、陸上部員としての自信や誇りをもたせ、運動への興味やあこがれの対象となることを期待していたのではないか、そしてさらには母校養正へのアイデンティティ、すなわち母校愛を育成しようとしていたのではないかと思われる。実際、このパンツは「陸上王国養正」の象徴になっていくのである。

①－3 校内マラソン大会

校内マラソン大会は、養正高普の伝統的な年中行事で、この大会は峰岸赴任直後から始まった。すなわち、春季に校内学年別陸上大会を開き、選手を選抜して、彼らを練習させ、市内学年別対抗大会に出場させた後に、秋には全校生が参加する校内マラソン大会に参加させた。1921年に始まり、毎年、三仙坪という近くの広場で举行された。

以上のように、峰岸は体育授業だけでなく、運動部長として様々なスポーツの普及に貢献しているが、自ら体験してきた長距離走を中心とする陸上競技において、特に大きな貢献を果たしている。その指導方法は、自ら率先して模範を見せる指導であった。また、学生に興味を持たせる工夫ややる気を起こさせるための工夫をしていたことが窺える。その象徴の一つが「オレンジパンツ」という極めて自由で革新的な着想による産物であったといえよう。

② 陸上競技で出場した大会

峰岸が特に熱心に指導した陸上部について、どのような大会に出場したのか、その主な特徴は何なのか、春秋の校内大会以外の大会から見てみよう。

陸上部創立直後、はじめて参加したのが当時日本陸上競技指導の第一人者であった野口源三郎を迎えて開かれた朝鮮体育会主催の競技大会であった。これには、養正高普から5人の陸上部員たちが出場したが、その中で李鍾元選手は、野口の目にとまり、将来有望な人材として期待されたという。¹⁷⁾ 野口がどのような経緯で朝鮮体育会に招かれたのかは不明であるが、この時に峰岸と野口が朝鮮人選手指導の中で何らかの接触を持っていたのではないかと思われる。しかし、同時代のことを執筆した野口の著作からは、この点を確認することが出来なかった。¹⁸⁾

峰岸赴任から2年後、1923年11月8日延禧専門学校主催第2回全朝鮮中等学校対抗陸上競技大会で養正高普は優勝している。その後、この大会では、峰岸在任中8回出場して6回の優勝を果たしている。

表2のように、1925年までは朝鮮人団体等の主催による競技会がほとんどであるが、26年以降は延禧専門学校主催以外には日本人団体等が主催する大会への参加が多くなっている。25年からは朝鮮神宮競技大会に参加している。これは、競技力が向上するにつれて、参加大会を広げその実力を試していったものと考えられる。1927年からは、京城高等商業（以下「京城高商」と略）主催の全鮮中等学校対抗陸上競技大会に出場しているが、京城師範学校に競り合う競技を展開しながらも、優勝には届いていない。しかし、その実力は着実に高まり、駅伝競走においては朝鮮内に敵なしの状況になっていく。

1930年4月3日に朝鮮体協主催で開催された第1回京城－仁川間往復駅伝競走は、一度中断し、再び開催されるようになったものであった。その再開経緯は、次のようなことであった。

表 2. 峰岸教諭在任中の養正高普参加競技大会

年 月	主 催 者	競 技 会 名
1921年 春	朝鮮体育会	競技会（野口源三郎招聘）
1922年 10月 29日	朝鮮体育会	第 6 回極東大会朝鮮予選陸上競技大会
1923年 晩春	不明	皇太子成婚記念オリンピック大会兼満鮮対抗陸上競技大会出場選手予選大会 《第 1 回校内学年別対抗陸上競技大会》
11月 3日	不明 全鮮中等学校陸上競技連盟会 延禧専門学校	全国体育大会 各中等学校対抗競技会 第 1 回全鮮中等学校対抗陸上競技大会（優勝）
1924年 4月	不明	万国オリンピック予選大会
10月 16日		《第 2 回各学年対抗競技会<延専主催第 2 回中等学校対抗陸上競技大会出場選手>》
10月 25日	朝鮮体育協会	明治神宮競技大会派遣選手予選大会
11月 8日	延禧専門学校主催 東亜日報社後援	第 2 回全学年中等学校対抗陸上競技大会（優勝）
1925年 5月 16日	朝鮮日報社	全鮮専門学校及中学校対抗京仁間駅伝競走（優勝）
5月 16日		《校内学年別陸上競技大会》
6月 13日	朝鮮体育会	網干選手歓迎陸上競技会
6月 25日	朝鮮体育会	第 2 回陸上競技大会
9月 23日	延禧専門学校	全鮮中等学校対抗陸上競技大会（2 位）
10月17,18日	朝鮮体育協会	第 1 回朝鮮神宮競技大会
10月 24日		《第 4 回校内学年別陸上大会》
1926年 6月 13日	朝鮮体育協会	鮮満対抗陸上競技大会
9月 25日	延禧専門学校	全朝鮮中等学校対抗陸上競技大会（優勝）
10月 10日	京城日報社	町洞対抗リレー大会（蓬萊町代表・峰岸も出場）
10月15～17日	朝鮮体育協会	朝鮮神宮競技大会
1927年 4月 10日	不明	南鮮オリンピック大会（招請受け出場。鎮海）
5月 10日		《学年対抗陸上競技大会》
6月 19日	京城高商	全鮮中等学校対抗陸上競技大会（2 位，優勝京師）
	朝鮮体育協会	極東オリンピック大会第 1 次予選
7月 21日	朝鮮体育協会	夏季練習会（5 日間）
9月 20日	延禧専門学校	全鮮中等学校対抗陸上競技大会（優勝）
10月15～17日	朝鮮体育協会	第 3 回朝鮮神宮競技大会
		《校内陸上大運動会》
12月 11日	諸岡商会主催 朝鮮運動タイムス後援	京仁間駅伝競技大会（優勝）
1928年	不明	南鮮オリンピック（鎮海）に招請され出場
5月 12日		《校内学年対抗陸上競技大会》
6月 17日	京城高商	第 2 回全鮮中等学校対抗陸上競技大会（盟休事件中の出場。2 位。優勝京師範）
7月 21日	朝鮮体育協会	夏季練習会（10 日間）
8月 5日	朝鮮体育協会	第 1 回朝鮮中等学校陸上競技選手権大会
10月 1日	延禧専門学校	全鮮中等学校陸上競技大会（優勝）
10月15～18日	朝鮮体育協会	第 4 回朝鮮神宮競技大会
	学生マラソン連盟主催 報知新聞後援	東京一京都間駅伝（郭爽根朝鮮代表で参加）

1929年 1月 13日	関西大学	全国中等学校大阪神戸間大駅伝競走大会（優勝）
5月 12日		《校内学年対抗陸上競技会》
6月 9日	京城高商	全鮮中等学校対抗陸上競技（2位。優勝京師範）
6月 10日	朝鮮体育会	全鮮競技大会（2日間）
7月 23日	朝鮮体育協会	夏期練習会（10日間）
8月 5日	朝鮮体育協会	第2回朝鮮中等学校陸上競技選手権大会
9月 23日	延禧専門学校	全鮮中等学校陸上競技大会（優勝）
10月 12日	朝鮮体育協会	第5回朝鮮神宮競技大会（4日間）
11月 6日		《本校秋季陸上大運動会》
1930年 1月 12日	関西大学	全国中等学校大阪神戸間大駅伝競走大会（優勝）
4月 3日	朝鮮体育協会	第1回京城－仁川間往復駅伝競走（優勝）*
5月 4日	朝鮮体育協会	極東オリンピック大会朝鮮第1次予選
5月 10日		《校内学年対抗競技会》
6月 8日	京城高商	全鮮中等学校陸上競技大会（優勝できず）
6月 22日	朝鮮体育協会	日本学生陸上競技欧州遠征団対全朝鮮陸上競技大会（金恩培朝鮮代表として参加）
6月 28日	朝鮮体育協会	全朝鮮陸上競技大会
7月 22日	朝鮮体育協会	夏季練習会（10日間）
8月 4日	朝鮮体育協会	第2回全鮮中等学校陸上競技選手権大会
8月 17日	朝鮮日報及び朝鮮体育会共同	慶大対全朝鮮陸上競技大会（金恩培朝鮮代表参加）
9月 24日	延禧専門学校	第8回全朝鮮中等学校陸上競技大会（優勝）
9月 28日	朝鮮体育協会	第6回朝鮮神宮競技大会京城予選
10月 13日	朝鮮体育協会	第6回朝鮮神宮競技大会（6日間）
10月 15日		《本校秋季大運動会》
1931年 1月 18日	関西大学	全国中等学校大阪神戸間大駅伝競走大会（優勝）
4月 3日	朝鮮体育協会	第2回京仁間駅伝競走大会（優勝）

備考：主催者の太字は、朝鮮人の団体、新聞社、学校を示す。

競技会名欄の《 》内の大会は校内大会を示し、（ ）内は補足、戦績等を示す。

* 社会人チーム（白馬クラブ、総督府、鉄道局）を相手に優勝している。

出典：養正体育史 33～150頁より作成

「この競技は2，3年前までは年中行事として実施されて毎年わが養正が優勝を獲得したが、残念ながら今まで中断されていた。その原因は、養正チームが非常に強くて大会の度に養正に対抗するだけのチームが出場できず、主催者側と一般ファンの興味が消えてしまったためであった。ところが、昨今、我が国運動界も目覚ましい発展を見せ、養正チームに対抗するのみならず、実力が飛び抜けた社会人チームも多くなった。今年朝鮮体育協会では新しい優勝旗を作って京仁間駅伝競走を再開した。今まで京城－仁川間片道駅伝競走は、数回あったが、往復は今度が初めてである」。¹⁹⁾

この大会でも養正は、社会人チームを退け優勝している。そして「陸上王国養正」を象徴したのが、1929年から3年連続優勝を勝ち取った大阪神戸間中等学校駅伝競技であった。日本全国から集まった中等学校の強豪駅伝チームとの対戦で3年連続優勝しているのである。29年1月にはじめて参加することになるのであるが、その経緯について峰岸は次のように語っている。

「一昨年からの懸案だった全国中等学校対抗駅伝競走の日本遠征計画は、費用その他様々な

事情により実行できなかったが、今回幸運にも機会が与えられた。

国内（朝鮮内—引用者）では、中等学校対抗、または一般チームの駅伝が京仁間で数次にわたって挙行されたが、いつでもわが校養正軍が優勝した。すなわち、わが養正は国内では斯界において常勝將軍であった。しかし『井の中の蛙』という言葉のように国内では常勝軍で優勝するが、日本の中等学校と比較すれば、問題は変わるはずだ。学校当局に請願した結果、校長先生を初めとして諸先生方の賛成をいただき、とうとう日本遠征の実現が確定した。完全に確定した後、各選手たちの練習は一層加熱し、零下10余度の寒い朝でも、吹雪舞う夕暮れでも、一日も休まず、講堂の片隅で、血の涙が出る練習を続けた。誰がこれを単なる運動練習だと見る事が出来ようか」。²⁰⁾

このように日本遠征は、27年頃から考えていたということであり、費用の面などで実現できなかったようである。また、遠征確定後は、猛烈な練習を行いそれに備えていたことも窺える。このような学校や周囲の協力と猛烈な練習によって、3年連続優勝という快挙を実現したのである。

ではなぜ峰岸は、これほどまでに駅伝に力を注いだのであろうか。それについて峰岸は「再度駅伝に優勝して」という「遠征記」の中で次のように述べている。

「朝鮮のように11月から翌年3月頃までが大部分氷雪となっているところでは、日本のウィンタースポーツを除いては、その期間の運動が中止状態におかれるようになる。これは、日本のように比較的気候が温和で年中無休で演習が続けられるのとは比べれば、練習面やその進歩において遅れるということは理論上で明確なことである。もしそうでないとしても、前に進むことは出来ないのである。それでは、如何なる方法でわれわれが彼らに遅れをとらないで並行して進むことが出来るか。これは朝鮮の自然的難関であり、この冬眠期間を征服することが一大事と考えられる。これを征服する最善の方法は、節度ある長距離競走の練習を続けることである。何らの目標もなくこれに任じることは難しいことであるので、また面白くない競技であるので、まず当面の目的として駅伝競走に出場することを目標とした。すなわち、この目標に向かって精進する間に、知らず知らずの間に遠大な大理想を実現するためである」。²¹⁾

つまり峰岸は、朝鮮という気候風土や経済環境に応じたスポーツを普及するためには、陸上長距離走がふさわしいこと、長距離はおもしろさに欠ける競技なので、当面の目的として駅伝競走に出場すること、将来的には長距離走で優秀な選手を育てることという遠大な大理想があったということである。その大理想は遠からず実現し、先に述べたように金恩培、南昇龍、孫基禎などのオリンピック選手を輩出したのである。

1931年1月18日、養正高普陸上部は、阪神駅伝において日本の強敵17校を制して3年連続優勝という偉業を達成した。この勝利は、朝鮮人にとっては「日本と我が国の対決のような印象を与えた」²²⁾といい、養正関係者の興奮ぶりは当然であったが、朝鮮人の民族意識を刺激したことは間違いない。この大会終了後、凱旋軍養正高普陸上競技部一行を祝賀しようと朝鮮体育会、朝鮮運動記者団、養正同窓会発起で祝賀会を盛大に開かれている。この会は、後に日章旗抹消事件で新聞記者追放となる李吉用の司会ですすめられ、発起団側を代表して朝鮮体育会常務理事金圭冕の開会辞と朝鮮日報安在鴻、同窓会白鴻均の祝辞があり、主将李壽榮の答辞と選手及び峰岸の感想があったという。²³⁾ その祝辞、答辞、感想など内容は明らかではないが、「花咲くような笑いと喜びが混じり合った夜を和気あいあいの中で送った」²⁴⁾

といわれ、朝鮮人としての喜びと連帯を感じさせるものであったといえよう。

以上のように峰岸在任中の参加競技会の特徴を見るとき、峰岸の養正での、あるいは朝鮮でのスポーツ普及にかける思いを窺うことが出来るし、その活動が朝鮮人に与えた影響を垣間見ることが出来よう。そこには、骨身を惜しまず指導した峰岸の姿があったようである。

1931年1月の阪神駅伝第3区走者であった趙寅相の回想録によれば、峰岸は、「どんな学生でも有望な選手になるのだと判断され、私財をはたいて自宅に宿泊させながら特別訓練を実施して、理論的な技術指導、体力管理など総合的な指導をして、私生活までも世話してくれた」ということである。²⁵⁾

③ 同盟休校事件と陸上部の対応

③-1 同盟休校事件と大会出場

1928年6月15日、養正高普でも同盟休校（以下「盟休」と略）事件が起こっている。その二日後には、全鮮中等学校陸上競技大会が開催される予定であった。この時に陸上部が選択したのは、大会参加であった。その経緯は、次のようであった。

「第2回京城高商主催全鮮中等学校対抗陸上競技大会が6月17日京城運動場で開催された。前年には僅少さで優勝校京師に破れて、今年こそは必ず優勝をと期待していた。選手たちは、新春2、3月頃から練習を怠らないでこの大会を目標としてきた。6時間の授業を終えて、疲れた体を休憩もなく、連日訓練院に行くこと1ヶ月余り、去年の恨を晴らすために大陣営が整備された。ひたすら今度の競技日を待ちこがれるのみ。しかし、思わぬ不運を迎えた。大会前わずか2日、この時を忘れることが出来ない。盟休事件が突発したのである。

参加中止が決定されたが、大会前日選手たちが集合して『我々は中止することが出来ない。勝負は別としてどんな障害があっても出場して運動精神に立脚して奮闘しよう』といった。結局、悲壮な覚悟で学校に上申して出場することになった。学校的行事である競技大会がこのような状態で行われるようになったことは悲しいことである。結果は、昨年と同様に京師に破れた」。²⁶⁾

③-2 盟休事件とは

では、この盟休事件とはどのようなものであったのであろうか。東亜日報はこの事件について、1928年6月17日から7月9日まで7回にわたって報じている。この事件は、6月14日午後1時、三、四年生176名が四つの要求を学校長宛に提出したことから始まったものである。四つの要求事項とは、

- 1) 日本人教師3名と朝鮮人教師1名、計4人の排斥
- 2) 校友会自治を学生達に一任すること
- 3) 朝鮮人本意の教育をさせること
- 4) 朝鮮人教師を教務主任にすること

であり、24時間内に回答を要求している。これに対して、学校側は翌15日午前10時に学生達を集めて、前記の要求条件を撤回しなければ、三、四学年全員と行動を共にした者全員に無期停学を命じるという声明を出した。そこで学生側は、三、四学年全員に休校を命じ、一年、二年、五年生332名に対しては、15、16両日間臨時休学を宣言した。これに対してまた、学校側は、15日に盟休生全員の保護者に25日までに学生を連れてこなければ、断固とした処置をすることを通知したということである。²⁷⁾

東亜日報によれば、盟休は「一種の流行として広がって行く兆し」があり、同じ頃に徹新や五星などの私立学校であったほか地方の学校でも起きている。²⁸⁾ 総督府では、その裏面を調査した結果、「一、学校職員間の不和」、「二、先生の教授欠陥」、「三、背後の扇動団体」等があることを示し、これに基づいて16日午後、各中等以上の学校長宛に盟休に対しては「嚴重に処置」するように警告を意味する通知を発送している。²⁹⁾

養正高普当局では、「学生自身達の自重を信じ」たが³⁰⁾、19日午前には、突然二年生一同(127名)が三、四学年の盟休条件に同情して盟休に加わった。学校側では、三、四年生と同じ行動と見て、全員に無期停学処分を發して、即時父兄宛に25日までに本人を連れて登校し、謝罪の誓約書を提出すれば無期停学を解除するという通知を發すると同時に、一年生と五年生には、今日21日から25日まで臨時休学することを宣言した。そして19日夜、学校側は、事件の主導者を調査した結果、19名の学生に対して退学処分を下してこれを掲示した。またその後二学年1名にも退学命令を出した。³¹⁾

こうした学校側の断固とした処置に対して、学生側では全ての問題を同窓会に一任して、22日午後3時頃各学年の内百余名が誓約書を提出し、この事件は収束することになる。³²⁾

この事件は、学校側の強硬な対応に学生側が屈した形で一週間という短期間で終わっている。しかしこの事件は、当時の「盟休流行」という社会状況の中で起きたものであり、卒業学年である五年生と入学して間もない一年生は参加していないが、二年生もやがて同調しており、三、四年生を中心にして、養正高普としては十五年ぶりに起きた大きな盟休事件であった。

盟休事件は、学生の教育改善要求に対する学校側との対応の中で起きたものであった。学生側の要求の背景には、日本人教師や朝鮮人教師の中に「教授上の欠陥」をもつ者がいたり、校友会自治が学生に一任されていなかったり、朝鮮人本意の教育になっていないと学生たちが感じる状況や、教務主任が日本人である実態が存在していたことが窺える。これらの改善を求めることは、「一視同仁」政策下の教育要求として正当の主張であったといえよう。それゆえに、三、四年生をはじめ二年生のほとんど全員に支持されたのである。

盟休発生当日、直ちに陸上部の大会参加中止が決定されている。これは学校側の決定であったと思われる。その翌日、陸上部は学校当局に大会参加を上申している。ここに陸上部の姿勢が示されているといえよう。上申に対して峰岸がどのような態度を取ったかは明確ではないが、部員たちの陸上競技大会参加に許可を与えたかあるいは黙認を含めて「認めた」と見ることができる。

この陸上部の大会参加が盟休に与えた影響は窺えない。むしろ、陸上部が大会に参加した翌々日には、二年生全員が盟休に加わっており、規模は益々拡大していったのである。あるいは逆にこれが大会参加に対する影響であったかも知れない。いずれにせよ、学生側としては、陸上部の行動によって盟休に否定的影響を受けるほどのものではなかったようである。しかし、陸上部の行動は、盟休からの逸脱であり、反盟休の行為であったことには違いなかった。

学校側は、当初から学生側を厳しく取り締まる方針で臨んでいた。その中で学生に「自重」を求めていたのである。陸上部の行動は、こうした学校側の処置と同一線上に存在するものであったといえよう。

④ 養正高普陸上部員の卒業後の進路

『養正体育史』において、峰岸が在職中の学生の卒業後の進路に関わる記述は、わずかに三、

件確認できるだけである。

一つは、1929年度の東亜日報の「陸上の十名星」という記事の引用で、各種競技会で優勝した選手達が「社会一般から格別の関心を集めており」、「本校を去る運動選手たちに惜別の情と激励を惜しまなかった」として、その進路を以下のように紹介している。³³⁾ (選手名のあとの括弧は年齢を示している。)

◇陸上競技部◇

鄭商熙 (21) — 1,500 m, 早稲田大学

郭夷根 (21) — 12 マイル, 関西大学

愈鎰濬 (23) — 100 m, 京医専

愼允範 (23) — 100 m, 延禧専

安載憲 (23) — 一走高跳, 早稲田大学

金東旭 (22) — 砲丸, 城大予科

安炳台 (23) — 三段跳, 京城高工

黄大善 (22) — 800m, 城大予科

徐炳麟 (23) — 円盤, 早稲田大学

安井奎 (21) — 一走幅跳, 就職

◇庭球部◇

白學賛 (20) — 主将, 前衛, 京法専

霍良鎬 (22) — 後衛, 京都高等

劉斗壽 (23) — 後衛, 家事

李用萬 (21) — 応援隊長, 家事

この一覧から29年度の卒業生の進路を見ると、陸上部員のほとんどが専門学校や大学へ進学していることがわかる。その進路先は、朝鮮内の官立大学予科・専門学校（城大予科2，京城高工，京城医専）と日本の大学（早稲田大学3，関西大学）が四名ずつであり、朝鮮内の私立専門学校（延禧専）は一名となっている。これらの中で郭夷根は、もう一つの記事から確認できるように、総督府に所属しており進学していなかったようである。また、他の学生もこの通り進学したかは確認できなかった。

とはいえ、このような進学の可能性があると伝えられていることは、当時の養正運動部学生の進路がいかに有利であったかを示すものといえよう。では当時このような高等教育機関にどれくらいの学生が進学できたのであろうか。この時期は、初等学校である普通学校でさえ就学率が伸び悩む「沈滞期」で、1926年から32年まで17.6%から18.9%にわずか1.3%増加しただけであった。³⁴⁾ 古川よれば、1929年度の普通学校と私立各種学校の生徒数の合計は527,485名で推定学齢児童数を2,932,251名とすると、その就学率は18.0%になる。³⁵⁾ この学齢児童数をもとに同年の京城帝国大学予科朝鮮人就業率を求めると在籍者数が107名であったから、その割合は0.015%になる。³⁶⁾ 陸上部卒業生の進路がいかに恵まれたものであったかが窺える。

もう一つは、1930年4月3日に開かれた「朝鮮体育協会主催第1回京城—仁川間往復駅伝競走」各区間出場選手を示したものである。³⁷⁾ この競技会には、養正高普の他は社会人チームで、総督府、龍山鉄道、白馬倶楽部が参加している。この中に、26年陸上部主将の崔慶洛と29年陸上部主将の郭夷根が総督府職員チームに所属しており、23，24年に陸上部に在籍した李聖實が龍山鉄道職員チームに所属し、それぞれ選手として出場している。

このように陸上部主将二人が総督府に就職している。この二人だけであったのか、その後が続いたのかは明らかではない。また、このことに峰岸がどのように関わったのかは明らかではないが、養正高普陸上部卒業生が総督府や龍山鉄道のような植民地支配機構に就職していたことは事実である。

もう一つ就職先がわかるのは、22，23年最初の陸上部主将で25年に卒業している朴駿榮

が大阪毎日新聞社（以下「大毎」と略す）社員になっていることである。³⁸⁾ 養正高普が日本に遠征する時は、卒業生が様々な支援役を果たしているが、朴駿榮は最初の卒業生であり、阪神駅伝では最も中心的な世話役を果たしている。大毎は、1905年統監府時代から新聞拡張のために朝鮮に入っているが、³⁹⁾ 1930年代後半には京城日報をしのぐ配布部数を持ち、その読者のほとんどは日本人であったという。⁴⁰⁾ 朴駿榮がどのような経緯で同社に入社したのかはわからないが、日本との関係や日本での生活を選択したことに向きであったと見ることができる。

以上のように、指導内容や方法、卒業生の実態などを見ると、峰岸は、朝鮮人学生を差別なく指導したが、その指導は、植民地支配政策を逸脱するものではなかったと言えよう。むしろ植民地支配と対立しない人材を育成していたことが窺われる。峰岸が植民地支配に敵対する民族主義的教育や運動をどのように見ていたかは、それを明らかにする資料を見いだすことはできなかったが、同盟休校事件での陸上競技部員の対応は、その責任者である峰岸の姿勢を窺うことができる。この限りでは、決して民族主義的運動に同調するものではなかったと考えられる。

4. 養正高普突然の辞任

前節で見たように、峰岸の養正高普での活動は、朝鮮人を差別せず、朝鮮人のスポーツ活動を支えるだけでなく、より発展させる役割を果たしたといえる。しかし、このような峰岸の活動は、突如として中断させられてしまう。それは、1931年5月10日付東亜日報の写真入り記事に見ることができる。その全文は以下の通りである。

「学園競技界の恩人 峰岸氏養正辞職

朝鮮学園陸上競技界では勿論である。一般競技界においてもその名前を高めていた養高普の陸上競技部監督峯岸昌太郎氏は、昨八日突然、同校の教職を辞すると同時に陸上競技部のコーチの任も辞した。年をおってその功名が伝えられ、同校競技史の今日をもたらしただ唯一の功勳者峯岸氏辞任の報が同校在學生と卒業生に伝わるや、哀惜の情を禁じえなかったという。

同氏は、昨日学校当局に辞表を提出し、學生一同に離別の挨拶をしたが、過去十年間のすべてのことが胸にしみて話すたびに感激し涙があふれ出たという。

氏の功績においては、最も記憶に新しい大阪神戸間駅伝競走に今春劈頭に遠征して、三年連続優勝したことを筆頭に、延専主催の中等校大会で五年連続優勝したこと、其他各大会で優勝したことをすべて数えることができないが、斯界の選手を多数養成したこと等、実にわが学園競技界の恩人であるといわざるをえない。写真は辞職した峯岸氏」⁴¹⁾

学園競技界の恩人
峯岸氏養正辞職

朝鮮学園陸上競技界では勿論、一般競技界においてもその名前を高めていた養高普の陸上競技部監督峯岸昌太郎氏は、昨八日突然、同校の教職を辞すると同時に陸上競技部のコーチの任も辞した。年をおってその功名が伝えられ、同校競技史の今日をもたらしただ唯一の功勳者峯岸氏辞任の報が同校在學生と卒業生に伝わるや、哀惜の情を禁じえなかったという。

同氏は、昨日学校当局に辞表を提出し、學生一同に離別の挨拶をしたが、過去十年間のすべてのことが胸にしみて話すたびに感激し涙があふれ出たという。

氏の功績においては、最も記憶に新しい大阪神戸間駅伝競走に今春劈頭に遠征して、三年連続優勝したことを筆頭に、延専主催の中等校大会で五年連続優勝したこと、其他各大会で優勝したことをすべて数えることができないが、斯界の選手を多数養成したこと等、実にわが学園競技界の恩人であるといわざるをえない。写真は辞職した峯岸氏



この記事にあるように、峰岸は、5月8日突如辞職している。なぜ辞職に至ったのか、その理由を明言できる資料は見出せなかった。『養正体育史』には、「一身上の事情で辞任」と次のように書かれているだけである。

「日本人教師としてこの間本校体育の育成と発展に多くの貢献をしてきた峰岸昌太郎先生が一身上の事情で辞任して、過去陸上部で活躍した先輩徐雄成先生を体育教師として迎えることになった」。⁴²⁾

しかし、当時の新学期が4月であったから、まさに学期途中の突然の辞職であった。辞職の挨拶の詳細は不明であるが、この辞職が峰岸にとっても、在校生や卒業生にとっても突然の無念の辞職であったことが窺える。しかも、辞職後の行き先は、明確ではない。ただ、同年6月13日までは朝鮮体協陸上競技部監督として活動していたことが窺えるだけである。⁴³⁾

この辞職の背景には、峰岸が養正高普にいることよりも、体協監督として活動している方が望ましい理由があったのではないかと考えられる。すでに見たように峰岸が植民地支配を逸脱するような活動をしたとは考えられない。ただ一つ考えられることは、朝鮮人に対する差別をしなかったことだけである。

朝鮮の支配政策は、1910年代の武力で強圧的に統治した武断政治が、1919年の三・一独立運動によって転換され、20年代の支配政策は、いわゆる文化政治と呼ばれ、「一視同仁」（日本人と朝鮮人を平等に見る）、「内鮮融和」（日本人と朝鮮人の融和）を標榜する施策が展開された。その意味では、峰岸の行動は、この政策に従順にしたがった行為であったといえる。しかし、朝鮮における実態は、こうした標語とはかけ離れた差別が厳然として続いていた。何よりも学校体系が日本人と朝鮮人で異なっていたことをあげることができる。日本人の初等学校は、小学校と呼ばれ、朝鮮人のそれは普通学校とよばれた。日本人と朝鮮人は、それぞれ別々の学校に通っていた。そもそも日本人と朝鮮人は別々の場所に住んでいた。学校体系が異なるだけでなく、生活基盤そのものが異なっていたのである。しかも、学校では教材配当が日本人と朝鮮人で異なり、教育内容においても差別が存在していた。

養正高普は、中等教育機関で、日本人の中学校に当たるものであった。このような学校体系は、武断政治期に設けられたものであった。日本人は中学校に、朝鮮人は高等普通学校にという教育システムが、「一視同仁」という差別しないという政策の中でもそのまま残されていたのである。平等を標榜する政策とは裏腹に現実的には差別を助長する制度がそのまま残っていたのである。峰岸の行動は、支配政策を忠実に実践したものであったが、現実的には支配政策に対応しない結果をもたらしたと見ることができる。

峰岸辞職の要因は、このような政策と現実のギャップにあったのではないか、そこに峰岸の辞任辞の無念さや朝鮮人の哀惜の念が表れているように思われる。

峰岸の送別会は、養正高普卒業生や在校生によって開催されている。それを報じたのは、1931年5月16日付東亜日報「峰岸監督送別会」の記事である。わずか一段九行の短い記事であるが、峰岸に対する朝鮮人の思いが伝わるものである。その全文は以下の通りである。

峰岸監督送別會
 養正高普教員으로 同校의陸上競技部를 今日의體石이잇을게한人 峯岸昌太郎氏辭職을 앓기는 同校의先輩及在學生選手들의發起로 送別會를 明十六日午後二時 郊外永導寺에서行할터이라는데 會費는一圓이오多數의捐助을받다한다

「峯岸監督送別会

養正高普教員で同校の陸上競技部を今日のように盤石にした恩人峯岸昌太郎氏辞職を惜しむ同校の先輩及在学生選手等の発起で送別会を明十六日午後二時郊外永導寺で行う予定だという。会費は一円である。多数出席を願うとのこと」。⁴⁴⁾

当時の物価や賃金などからみると会費一円は、卒業生や在校生にとっては決して軽い負担ではなかったのではないと思われる。⁴⁵⁾

この会が実際に開かれたかは確認できなかった。しかし、このような案内が出されたことは、先の辞職の記事でも伝えられているように「学園競技界の恩人」「養正陸上競技部の恩人」に対する感謝と惜別の念を多くの朝鮮人に知らせるものであったと思われる。峰岸の辞職を惜しむ養正高普の卒業生・在校生の発起で企画されたこと、そして何よりも、先の辞職の記事とともに、この記事が東亜日報に掲載されたことに朝鮮人たちの峰岸に対する思いを理解することができる。

4ヶ月後の9月に峰岸は、朝鮮体協主事に正式に選任されることになる。朝鮮体協は、1919年2月に日本人の野球とテニスのクラブが中心となり、これらのスポーツを普及することをねらいとして作った親睦団体であった。しかし、この時期の朝鮮体協は民間団体であるが、スポーツにおける「内鮮融和」を推進し、朝鮮神宮競技大会の運営を任されるなど総督府と強い関わりを持つ団体になっていた。このような団体に再就職したのである。ここに、体協あるいは総督府の峰岸に対する期待が窺える。つまり、体協あるいは総督府としては、峰岸に朝鮮人選手（養正高普）の指導ではなく、日本人選手（朝鮮体協）の指導を望んだのではないかということである。

繰り返しになるが、当時朝鮮では「内鮮融和」「一視同仁」政策が標榜された。しかし、実態はそれとは裏腹な朝鮮人差別が厳然と存在した。峰岸の教育活動は、支配政策を文字通り実践したものであったが、朝鮮人を平等に指導した点でその本質と現実には対応していなかったと見る事が出来る。そのずれの増幅は、単にスポーツにおける達成以上の社会的民族的効果をもたらし、植民地の秩序を逸脱する可能性が生まれてくる。当時の朝鮮社会は「1920年代末から30年代初頭にかけて、労農運動・学生運動がピークに達する」⁴⁶⁾状況であった。同盟休校が流行し、「20年から28年までに453件の盟休が記録」⁴⁷⁾され、29年には植民地下最大のストライキといわれる元山ゼネストをはじめとして「102件のストが発生」⁴⁸⁾しており、三・一運動以降最大の独立闘争と呼ばれる光州学生運動なども同年に起きている。「ほんのささいな日常的な出来事が、たちまち大きな民族運動に発展するほど、民族矛盾が激化していた」時期であった。⁴⁹⁾ 峰岸の突然の辞職は、こうした時代と社会状況の中で起きたものであった。

5. 結 語

以上のように、峰岸の養正高普での活動内容を検討しながら、なぜ10年間の活動を閉じなければならなかったのかを検討してきた。峰岸の養正高普での教育活動を見ると養正高普をスポーツの盛んな学校にする基礎を築いたのであり、とりわけ陸上競技では日本を含めて「陸上王国」と呼ばれる程、熱心に指導したのである。しかも、その指導は、朝鮮人を平等に扱い、

朝鮮人に慕われるものであったことが確認できた。しかし、辞職の理由については、「一身上の都合」以外に明白なものではなかった。しかし、これについては、学期途中の「突然の退職」であり、むしろ「解雇」に近いものであったことが窺えた。退職1ヶ月後には、体協陸上部監督として日本人選手の指導に当たっていたが、これが正式な再就職先であったかは不明である。4ヶ月後、朝鮮体協主事になる。朝鮮体協は、総督府と強い関わりを持つ民間団体であった。ここに、峰岸と体協や総督府との関わりが想起される。峰岸は、朝鮮人ではなく、日本人を指導することが求められたのではないかということである。1920年代末から30年代初頭の朝鮮の社会は、民族矛盾が激化しており、些細な問題から民族運動に発展する状況であった。こうした時代状況の中で峰岸は、自らの意に反して「朝鮮人を平等に指導できない」逆説的な選択を求められたように思われる。しかし、本論では言及できなかったが、峰岸がその後全く朝鮮人選手の指導をしなかったわけではなかった。それが後に起こる「体協主事解職」というもう一つの火種になるのかも知れない。峰岸の養正高普辞職の要因については、資料が十分ではなく、こうした論理的仮説に止めざるを得ない。

峰岸については、養正高普辞職後の活動を明らかにすることが残されている。体協選任の経緯、体協での活動内容、再び遭遇する「解職」という事態、これらの検討を踏まえて、朝鮮人に慕われた日本人体育教師峰岸昌太郎像を明らかにすることである。それは、植民地支配の中での、とりわけ、いわゆる「文化政治」の下での体育と教育の現実を示すものであり、支配政策の本質と現実を示すものだと考えられる。そこには、この時代に対する日本と韓国・朝鮮相互の歴史的共通認識を深める事実が内在されていると思われる。

注)

- 1) 鎌田忠良 日章旗とマラソン 潮出版社 1984 399頁
- 2) 李丙權編 養正体育史 養友体育会 ソウル 1983 149頁には、「峰岸先生退任」として以下のような記述がある。
峰岸先生は1921年4月初めに赴任して満10ヶ年、我校の運動部長として全精力を傾注した結果様々な運動競技部、その中でも陸上競技に全力を尽くして多くの選手を輩出したし、日本にまで進出させ連戦連勝「無人の地」のような気概を轟かすようになった。たとえ彼は日本人教師であっても最善を尽くして指導に任じたし、陸上養正の今日があるまで「正々堂々と戦い勝ちなさい」という教訓と共に多くの功績を残した。養正での体育教師職から退任した後、朝鮮体育協会に勤務して、1933年には満州新京に就職のために旅立った。
- 3) 日本体育大学 同窓会名簿 1巻 不明者欄に掲載 1996 9頁
- 4) 前掲 養正体育史 36頁
- 5) 東亜日報 1933年1月21日付に「競技界の恩人 峰岸氏満州に 新京に職を求めて」という見出しで、以下のような記事がある。「朝鮮陸上競技界の恩人であり、また今日オリンピック選手を出した養正高普陸上競技部の陸上の王者を育てた前朝鮮体協主事峯岸昌太郎氏は事情に依り体協を辞し、これまで病気で順化院に入院治療中であつたが、過日退院して来る二十三、四日頃に満州新京に向かって出発する予定だと言う。そこでもまた、陸上競技指導方面で活動する筈だと言うが、氏のような十年来の朝鮮陸上競技界恩人を失うことになることを各方面に哀惜の念をかきたてていると言う。」
- 6) 前掲 養正体育史 36頁
- 7) 養正90年史編纂委員会 養正90年史 養正義塾 1995 138頁
- 8) 同前
- 9) 前掲 養正体育史 354～355頁
- 10) 同前 740～741頁
- 11) 同前 36頁

- 12) 山本邦夫 陸上競技史 道和書院 1970
山本邦夫 近代陸上競技史 上巻, 中巻, 下巻 道和書院 1974
山本邦夫 日本陸上競技史 道和書院 1979
- 13) 前掲 養正体育史 36 頁
- 14) 前掲 養正 90 年史 143 頁
- 15) 前掲 養正体育史 36 頁
- 16) 同前 37 頁
- 17) 同前 101 頁
- 18) 野口源三郎遺稿集刊行会編 野口源三郎遺稿集 不昧堂書店 1969
- 19) 前掲 養正体育史 133 頁
- 20) 同前 116 頁
- 21) 同前 127 頁
- 22) 同前 138 頁
- 23) 同前 139 頁
- 24) 同前 139 頁
- 25) 同前 164 頁
- 26) 同前 120 ~ 121 頁
- 27) 東亜日報 1928 年 6 月 17 日付 2 面
- 28) 東亜日報 1928 年 6 月 18 日付 2 面
- 29) 同前
- 30) 同前
- 31) 東亜日報 1928 年 6 月 20 日付 5 面
- 32) 東亜日報 1928 年 6 月 24 日付 2 面, 同 6 月 27 日付 2 面
- 33) 前掲 養正体育史 129 頁
- 34) 吳天錫著, 渡部学・阿部洋訳 韓国近代教育史 高麗書林 1979 286 ~ 287 頁
- 35) 古川宣子 植民地朝鮮における初等教育—修学状況の分析を中心に— 日本史研究 370 1993 40 ~ 41 頁。古川は, 推定学齢児童数を総人口に 0.1561 を乗じたものとして計算しており, 1926 年の就学率は 17.2 % で 1932 年のそれは 18.3 % としている。古川は, 注で断っているように, 「統計年鑑」各年度間で同一年度の数値に違いがある。また, 筆者が確認したもので, 総人口は各年十二月末で共通しているが, 学校数は年度末日の値であり, 生徒数は, 各年度 5 月末の値であったり, 3 月 1 日現在のものであったりしている。このため, 「信憑性の高い方を選択した」古川の数値に従った。
- 36) 予科の就学率の母数は, 1921 年の推定学令児童数 2,662,966 名から 29 年のものの間にあると考え, およそ 280 万名とした。また, その内の予科の在学年数である二年間にあたる推定学令児童数を求めると約 70 万名になる。同年の予科在籍者数が 107 名であるから (朝鮮総督府編纂 「昭和 4 年朝鮮総督府統計年報」 677 頁「京城帝国大学予科状況」より), これを 70 万で除した値を予科就学率とした。
- 37) 前掲 養正体育史 133 頁。当日の京城仁川間往復駅伝競走出場選手は以下の通りである。

区 間	マイル	養 正	総督府	龍山鉄道	白 馬
1 区 京城郵便局前—梧柳洞	11.5	李冕薰	崔慶洛	深 津	崔周元
2 区 梧柳洞—富平	7.6	趙寅相	遠 藤	陳敬元	金龍出
3 区 富平—上仁川	7.0	金珍培	馬鳳玉	森 田	金點龍
4 区 上仁川—富平	7.0	吳定根	郭夷根	李聖實	尹鍾鎬
5 区 富平—梧柳洞	7.6	咸炳文	松 岡	岩 本	李聖福
6 区 梧柳洞—京城郵便局前	11.5	金恩培	久富進	土 屋	李性根

- 38) 同前 116 頁
- 39) 大阪毎日新聞社編 大阪毎日新聞五十年 1932 437 頁。
- 40) 水野直樹氏によれば, 1937 年時点で京城日報の配布部数が約 3 万部だったのに対し, 大阪朝日新聞 6 万 6 千部, 『大阪毎日新聞』 7 万 3 千部という状況であったという。(ゆまに書房ホームページ 朝日新聞外地版 「推薦のことば」より <http://www.yumani.co.jp/detail.php?docid=401> 2007 年 12 月現在) なお, 当時, 大阪毎日新聞は門司に支社があり, 朝鮮版が発行されていた。ここに勤務していた

のか、大阪本社勤務であったのかはわからなかった。（東京大学総合研究博物館画像アーカイブス—日本の新聞広告 3000 日刊紙『西部毎日』大阪毎日新聞朝鮮版 第 1075 号，大正 15 年 4 月 29 日発行 門司，大阪毎日新聞社 http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/ 2007 年 12 月現在）

- 41) 東亜日報 1931 年 5 月 10 日付
 42) 前掲 養正体育史 139 頁
 43) 京城日報 1931 年 6 月 18 日付。「国際競技に参加せる朝鮮選手の活躍（一）」という記事において「選手監督 峰岸昌太郎」として，同月 13，14 日満州奉天で開かれた国際大会に朝鮮体育協会から日本人選手を派遣したことを述べている。
 44) 東亜日報 1931 年 5 月 16 日付
 45) 当時，精米一升（1.8 $\frac{1}{2}$ 斗） 0.182 円，粟一升 0.109 円，牛肉百匁（375 g）0.342 円，鶏肉百匁 543 円，豚肉百匁 0.322 円などであった。（朝鮮総督府 昭和六年朝鮮総督府統計年報 1933 254 頁）また，朝鮮総督府及び所属官署職員俸給によれば，1931 年末現在で朝鮮人の内最も高給なのが殖産局奉任官で，年額 3,050 円，月額約 254 円，日額約 10 円であり，最も低いのは雇員で，その平均年額は 541 円，月額 45.1 円，日額 1.8 円である。総督府の朝鮮人官吏の平均年俸は，年額約 643.4 円，月額約 53.6 円，日額約 2.1 円である。（朝鮮総督府編纂 「昭和六年朝鮮総督府統計年報」 1933 700～701 頁。月額は年額÷12，日額は月額÷25 で計算した。総督府官吏の平均年俸は俸給年俸合計÷人員で計算した。）また，下表のように，朝鮮人一般労働者の日給が 0.58 円から 1.94 円くらいであったから，一円の会費は官吏の平均俸給日額の半分，一般労働者の平均日当くらいになる。

職 種	内地人	朝鮮人	備 考
左 官	3.32	1.87	日本人に対する朝鮮人の割合 56.3 %
石 工	3.41	1.94	同 56.9 %
木 挽	3.09	1.64	同 53.1 %
平人足	1.40	0.66	同 47.1 %
土 方	1.83	0.85	同 46.4 %
農作夫	1.10	0.58	同 52.7 %
擔 軍	—	0.62	天秤棒や背負子（チゲ）で物を運ぶ労働者のこと。

出典：前掲「昭和六年朝鮮総督府統計年報」255～256 頁より作成

- 46) 武田幸男編 世界各国史 17 朝鮮史 山川出版社 1985 280 頁
 47) 同前 282 頁
 48) 同前
 49) 同前 283 頁

出展：養正体育史（李丙權編　養正体育会　1983年）

[illegible]